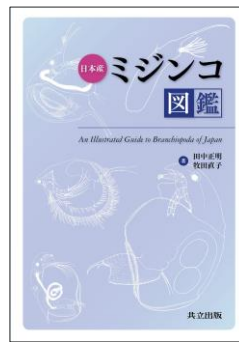


## 「日本産ミジンコ図鑑」を出版

6月25日(日)、四日市大学生物学研究所の田中正明所長と研究員でもある牧田直子准教授(環境情報学部)の共著、「日本産ミジンコ図鑑」(共立出版)が出版された。本書は日本に棲息している淡水産と海産のすべてのミジンコを掲載した国内初の図鑑で、ミジンコ1種類ごとに全体像や部分的な拡大図を多数掲載し、特徴的な部分を項目ごとに解説している。「分布が限られる希少なミジンコについてはその点も明記しており、見つけた方は研究所へご一報下さい」とのことだ。



## 「おもてなしロボット」の取組みが三重テレビで紹介

8月30日(木)、おもてなしロボット「CORON」が、三重テレビから取材を受け、夕方のニュースで紹介された。CORONは、テーブルでのオーダーシステムに加え、インバウンド客への言語対応や決済システムを取り備えている一方で、楽しくダンスを踊るなどのエンタメ機能も有するロボットだ。本学の岡良浩准教授は、このCORONをつかった産学連携による、「おもてなしサービス産業」のあり方について取り組んでおり、岡准教授はインタビューのなかで、「ロボットが接客しても、どう接客するかを考えることが“おもてなしの精神”に繋がる」と語った。四日市大学では、社会人、職業人として必要な力を養う「スキル科目」が配置されており、その一つが「おもてなし経営ユニット」である。このユニットでは、「おもてなし経営」の基本となる「おもてなし精神」とそれを表現するマナーやコミュニケーション、さらに、経営の基本を学ぶことができる。今後、さらに



学生目線でのCORONの研究が予定されている。



## 「夏のエコフェア2017」を開催

7月22日(土)から23日(日)の2日間にわたり、「夏のエコフェア2017」が開催された。会場は、三重県環境学習情報センターおよび周辺施設で、本学の環境情報学部がブースを出展した。2日目には一時、強い雨が降ったものの、特に大きな問題もなく、大変盛況な中で、無事終了することができた。エコフェア全体では、初日が約1,700名、2日目は約2,000名の来場者があり、環境情報学部ブースにも2日間で約500名の来場者があった。本学ブースでは「ドラえもん部屋」が子供たちに大人気で、待ち行列ができるほどであった。また、ペットボトルを利用した土壌実験も多くの子どもたちの関心を引き、大人向けの学部展示も好評で、両日とも、担当した教員は、ほとんど休む時間がないほどであった。小学校高学年から大人の方を対象として実施した「夏エコ環境講座」は、初の試みであった。熱心な受講者が多く、じっと聞き入る姿が多く見受けられた。

小学生向け講座でも、子どもたちが集中して聞き入り、何人もの子どもたちが、ノートにびっしりメモを取っていた。子ども向け講座では、全員に修了証をお渡しした。会場には、多くのブースが出展し、体験や工作を楽しみながら、エコについて学んでいただく機会となった。



これまでのPick Up Topicsは、ホームページでご覧いただけます。  
<http://www.yokkaichi-u.ac.jp/examinee/topic.html>

 文部科学省 **地(知)の拠点** Pick Up Topicsには、COC事業における記事が含まれています。

学校法人 暁学園 四日市大学

【発行】入試広報室

〒512-8512 三重県四日市市萱生町1200

TEL:059-365-6711 FAX:059-325-7218

<http://www.yokkaichi-u.ac.jp/>

<http://smile.yokkaichi-u.ac.jp/> (受験生サイト)

世界を見つめ 地域を考える

YOKKAICHI UNIVERSITY  
**PICK UP TOPICS**

建学の精神 人間たれ

2017年10月1日発行【季刊誌】

VOL.

**39**

P.1・「ひらめき☆ときめきサイエンス」を実施  
・3年連続 日本留学 AWARDS『大賞』受賞

P.2・伊勢湾海洋調査実習を実施  
・鯨船行事(ユネスコ無形文化遺産)に本学学生が参加  
・「広報よっかいち」に本学学生の意見が掲載

P.3・高校生選挙セミナーをアシスト  
・「日米学生会議 in 三重」に本学の学生が参加  
・松井ゼミが「在宅フェア」で調査結果を発表

P.4・「日本産ミジンコ図鑑」を出版  
・「おもてなしロボット」の取組みが三重テレビで紹介  
・「夏のエコフェア2017」を開催

## 「ひらめき☆ときめきサイエンス」を実施

7月28日(金)、「ひらめき☆ときめきサイエンス 沿岸海洋の実践科学教室」を実施した。これは、日本学術振興会が毎年募集している教育事業で、過去に科研費の代表者を務めた研究者が中心となり企画を練り、わかりやすい体験授業を行うことで、その研究成果を青少年に広めることを目的としている。今回は、四日市大学の千葉賢教授(環境情報学部)が中心となり、本事業を実施することとなった。地元である三重県や愛知県から集まった16名の高校生が午前10時に近鉄富田駅に集合し、そこからマイクロバスで四日市港ポートビルに向かった。午前中は、ポートビルの会議室にて、まず、千葉教授から「海の環境科学について」の講義を1時間受講した。物理、化学、生物などが関係した少し難しい内容であったが、高校生は一所懸命に聞いていた。その後、ポートビルの14階の展望室から360度の雄大な四日市港とコンビナートの姿を眺めたり、望遠鏡を覗いたり、楽しい時間を過ごした。

午後より、四日市港管理組合の巡視船「ゆりかもめ」で海に出て、四日市港内の2地点で採水や採泥などの海洋調査を体験した。調査内容としては、クロロテック装置で水温・塩分・クロロフィル・溶存酸素を計測し、北原式採水器で採水を行い、それを各自がふらん瓶に採取し、溶液を加えて溶存酸素を固定した。その他に、透明度の調査とエクマンバジで採泥を行い、泥の酸化還元電位を計測したり、泥の臭いを嗅いだりした。また、プランクトンネットでプランクトンの採取も行った。2時間の海洋調査の後、マイクロバスで四日市大学に向かい、大学の実験室で溶存酸素の化学分析と光学顕微鏡、電子顕微鏡によるプランクトンの観察を行った。

実習が全て終了した後に、参加者の代表者が今日の海洋調査や実験観察で分ったことや感想を発表した。最後に、環境情報学部の井岡幹博学部長から、参加者全員へ修了証である「未来博士号」が手渡された。



## 3年連続 日本留学 AWARDS『大賞』受賞

四日市大学は、日本留学 AWARDS 私立大学文系部門〔西日本地区〕において、3年連続「大賞」を受賞した。「生活・学習面の留学生サポート」、「日本語学校との連携」などの取り組みに対する評価が受賞理由となった。日本留学 AWARDSは、一般財団法人日本語教育振興協会「日本語学校教育研究大会」が主催する「留学生の環境整備を目的」に設立された賞で、西日本、東日本の専門学校、私立大学文系、私立大学理系、国公立大学、大学院の категорияがある。

8月7日(月)、国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された表彰式では、本学を代表して留学生支援委員の加納光教授(環境情報学部)が出席した。加納教授は、「本学は、開学当初から留学生を受け入れ、きめ細かな教育指導と、そして、温かい留学生支援ということを心がけてきました。これからも、この名誉ある賞を頂きましたことに慢心せず、気を引き締めて留学生目線に立った、指導、支援を続けてまいります。」と挨拶した。



## 伊勢湾海洋調査実習を実施

8月2日（水）からの3日間、今回で9年目となる伊勢湾海洋調査実習を実施した。台風5号の影響で、うねりが太平洋沿岸で高まっていたため、伊勢湾外への航海は中止し、伊勢湾内の調査に切り替えた。初日は、松阪港から神島付近までの各種調査を行ったが、神島に近づくに従い船の揺れが大きくなり、船酔いする学生が続出した。

夜は、松阪港付近までひき返し、調査と気分転換を兼ねた釣りなどで過ごした。2日目は午前6時15分に起床し、ラジオ体操、デッキ磨き、船内清掃を行い、朝食後、湾口の神島付近まで南下。そこから湾奥の名古屋港沖まで、6地点で水質と底質の調査を行った。湾奥に北上するに従い、船の揺れも治まり、天気も回復し、学生たちの顔に余裕が見られた。湾口でベントスネットを曳いたところ、シタビラメやカレイ、マゴチ、シャコ、エビなどが採れ、観察後、すぐに冷蔵して、夜食の惣菜となった。今回の航海中海の透明度はかなり低く、全湾で植物プランクトンが多量に発生し、海水は緑色（湾口）から茶色（湾奥）になっていた。水深5mから10m付近に塩分躍層（塩分が大きく変化する層）があり、躍層の上部の塩分はかなり低くなっていた。また、湾央から湾奥にかけては貧酸素水塊が発生していた。

名古屋港付近では、大型船の近くで調査を行い、重工業をはじめとする産業が盛んな伊勢湾の一面を感じることもできた。夕食前の自由時間では、ほとんどの学生が釣竿を手にするなど、各自が楽しく過ごしていた。3日日も早朝に起床し、掃除や朝食をとり、閉校式を終えた。お世話になった船員の皆様に別れを告げ、今年度の海洋調査実習を終えた。



## 鯨船行事（ユネスコ無形文化遺産）に本学学生が参加

8月6日（日）、四日市市で行われた「大四日市祭」にて、「鳥出神社の鯨船行事」の担い手として、本学16名の男子学生が参加した。大学の地元である「四日市市富田地区」は、下町の風情を漂わせる、港を中心とした漁師町で、富田の人々にとっての「心のよりどころ」である「鯨船」は、昨年、ユネスコの世界無形文化遺産に登録されている。「鳥出神社の鯨船行事」は、四日市を中心とする三重県北勢地域に伝わる捕鯨行事の中でも、最も古来の姿を留めているとされるものの、全国のどの祭りとも同様に、維持や管理、そして担い手不足は大きな問題である。

富田地区には、現在4組の団体が「鯨船」を保有している。「神徳丸」を保有する中島組も、「鯨船」の演技に最低70名程度が必要であったが、「大四日市祭」を目前にして、50名弱しか集めることができなかった。そんな中、手を差し伸べたのが、四日市大学の岩崎恭典学長と、学長が担当する講座「祭りとまちづくり」を履修する学生たちで、この日は、鯨船を揺らしたり、鯨役になり逃げ回ったりと大活躍。メイン会場に登場すると、観客のフラッシュを一斉に浴びた。なお、本番は8月14日（月）・15日（火）に鳥出神社で行われ、中島組は、地元から70名と学生20名が参加した。



## 「広報よっかいち」に本学学生の意見が掲載

四日市市の発行している「広報よっかいち」の8月上旬号にて、本学の学生2名に関する記事が掲載された。この号は「未来に豊かな環境を引き継ぐために～四日市公害裁判判決45周年～」を特集したものだ。登場したのは豊田美波さん（環境情報学部4年）と、岡田勘汰さん（同学部2年）だ。2人は、地域志向科目である「四日市公害論」などで四日市公害について学ぶ中で、関心を深めたことなどを語っている。

なお、同じページには、四日市市長の森智広氏のコメントも掲載され、この歴史と教訓を受け継ぎ、未来によりよい環境を引き継ぐ使命について述べておられた。



## 高校生選挙セミナーをアシスト

選挙権年齢が満18歳以上に引き下げられて2年、若者の選挙への関心や投票率の向上に期待が寄せられているなか、8月3日（木）、四日市市文化会館第4ホールにて、四日市市選挙管理委員会主催の初の試みである「高校生選挙セミナー」が開催された。これまでもシティズンシップ教育の実績のある桑名西高校の水野悟先生のご指導のもと、市内の高校のうち暁高校など8校から参加した32人の高校生たちが、熱心にワークショップなどに取り組んでいた。このイベントの運営を、本学の総合政策学部の学生が、四日市市選挙啓発学生会「ツナガリ」のスタッフとしてアシストを行った。ワークショップの準備や書記係、本番さながらに再現された投票所にて実施された模擬投票での立会人などを行った。イベントをサポートすることで、高校生たちが選挙について一生懸命考えているのを見ることができたことは、「ツナガリ」スタッフである本学の学生たちにとっても良い刺激になったようだ。



## 「日米学生会議 in 三重」に本学の学生が参加

8月21日（月）、そらんぼ四日市にて開催された「日米学生会議 in 三重」に、ギミレ・スニタさん（総合政策学部4年）と遠藤憲行さん（同3年）が参加した。69回目の開催となった今年、地方会場として、初めて三重県が選ばれた。当日は「四日市公害の歴史を学ぶ」と題し、現地研修が実施された。日本全国とアメリカから選抜された学生75名の参加者に混じり、地元受入側として、本学からの上記2名に加え、四日市市内の高校生・大学生約10名も参加交流した。当日は8時15分に現地集合し、「四日市公害と環境未来館」の見学後、四日市公害語り部である野田之一さんの講話および質疑応答が行われ、最後に市立博物館が誇るプラネタリウムを全員で鑑賞した。

当日の進行は、ほぼすべて英語で行われたため、本学学生と系列校である暁高校、四日市メリノール学院高校の生徒計9名は、この現地研修に先立ち、神長唯教授（総合政策学部）による四日市公害に関する集中講義を受講した。特に、本学学生2名は、毎回3時間休憩無しで行われた集中講義3回と、「四日市公害と環境未来館」での事前学習の全てに参加した。あいにくディスカッションは時間の関係で行われなかったが、四日市公害について英語で説明できるよう、集中講義では専門用語の発音の確認をしてもらうなど、非常に熱心に講義に臨んでいた。



## 松井ゼミが「在宅フェア」で調査結果を発表

7月23日（日）、松井真理子教授（総合政策学部）のゼミの4年生が、四日市市文化会館第2ホールで開催された「在宅フェア」にて、地域住民による高齢者の支え合い組織の調査結果を発表した。もともと松井ゼミでは、地域コミュニティのあり方や高齢社会について学んでいるが、これを知った主催団体のNPO「あした葉」の伊世代表が、協創ラボを組み、学生に発表の機会をくださった。このため、あらためて羽津地区の「さろん de 志氏我野（しでがの）」、橋北地区の「ニコニコ共和国」、川島地区の「ちょボラかわしま」の3つの団体を訪問し、高齢の当事者やボランティアの方々にインタビューし、そのまとめを、上記の団体のリーダーの方々と一緒に発表することとなった。「高齢社会においていかに地域で生きるか」を「在宅フェア」の統一テーマとし、第一部は、四日市市長の森氏も登場する寸劇とホームホスピス協会理事長が講演を行い、第二部は四日市大学生の発表と、関係者によるトークが行われた。その後のトークでは、3人の学生が壇上に上がり、主催者の「あした葉」の伊世代表が、うまく進めていただいたこともあり、学生たちは活発に発言していた。

